

吾輩は産業振興の猫である

吾輩は猫である。どこで生まれたかとうんと見当がつかぬ。積み上げられた藁にまみれてニャーニャー泣いていた事を記憶している。親兄弟と何処でどのように別れたかは憶えていない。ここは自然が豊かで食うには困らなかったが、腹が減ったある日、竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩は今頃野垂れ死んでいたかも知れんのである。ここで吾輩は今の主人に遭遇したのである。この主人はあまり口を聞かぬ人と見えたが、吾輩を追い出すわけでもなく、飯を出してくれた。かくして吾輩はこの家を自分の住家と決める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は農業である。朝早く田畑に出ていき、夕方帰ってからは書斎に入ったきりほとんど出て来る事がない。忙しいと家族に漏らす割には、別段疲れた様子はなく、その顔には熱意が漲っている。吾輩なりに考えてみると、皆の命を繋ぐ食べ物を育てる喜びや、自然と関わりながら生産をしていく充実感を毎日得ているからだろう。さらには、日本の食生活や食文化を守っていくという自負が、吾輩の主人を輝かせているのかもしれない。近くの直売所に野菜を卸している主人と、近所の主婦が話しているのを聞いたことがある。曰く、吾輩の主人の作った野菜であれば子供が好き嫌いなく食べるとのことである。それもそのはず、その日採れた野菜をその日のうちに食す、これほどの贅沢はなからう。

以前の話になるが、学校の教師なる人間が来て吾輩の主人と話をしていた。何かしらと思っておいたら数日後、沢山の子供達がやってきた。こりゃイカンと遠巻きに眺めていたら、どうやら子供達が学校の昼飯の米を自分達で刈り取るらしい。どの子供も吾輩の主人の米作りの話を真剣に聞いていた。稲刈りの段では、やれ虫が出ただの、やれ疲れたなど、あれこれ騒いでいたが、実に楽しそうだった。吾輩の主人も、子供達も、皆笑顔。後日、稲刈りをした或る子供から手紙が届いたそうだ。自分も将来農業に携わりたいと。手紙を見る吾輩の主人の優しい目、柔らかな微笑み。吾輩は生涯その表情を忘れないであらう。

う。

ある晴れた朝、吾輩は少し遠出をしてみた。田畑を幾つか通り過ぎた向こうに、何やら大きな建物があった。おや、X氏が建物に入っていく。頭を丸めた温和な表情が特徴だ。毎朝散歩をし、小学生の子供を送り出してから仕事に向かうのが彼の日課であるが、猫の足でも容易くたどりつけるところで働いているとは思わなかった。昼休みには飯を食いに自宅に戻ることもできそうだ。

X氏の入った建物に忍び込んでみると、工場のような。何やら大きな機械が音を立てて動いている。何をしているのか吾輩には皆目見当がつかん。向こうでX氏が難しい顔をして書類を覗き込んでいる。X氏の指示で若者が機械を操作する。ひとしきり大きな音がした後、何やらピカピカした複雑な形状のものが機械から出てきた。喜色満面のX氏がどこかへ電話をする。どうやら難しい機械加工に成功したようである。これを何に使うのか、吾輩にはわからない。ただ、人間が使う便利な道具が多くの人の手を経て生み出されていることはわかる。ものづくりに携わるX氏の表情は輝いている。自らの技術が多くの人を支えているという矜持と充実感がそうさせるのだろう。

そうこうしていると、工作中的若い女性と目が合った。飯でも貰えるのかとニヤーンと近づいてみたら、乱暴にもいきなり吾輩の頸筋をつかんで丸め上げ表へと抛り出した。成る程、あれだけ清潔な工場では、吾輩の体毛が落ちるだけでも厄介だろう。吾輩に非があったと認めなければなるまい。周りを見渡すと、似たような建物が整然と並んでいる。新天地を求めてここにやってきた工場もあるらしい。道路には大型の自動車が走っており、盛んに積荷を捌いている。吾輩はこのあたりでは甚だ不人望らしく、何処へ行っても煙たがられた。何処も彼処も働く人の活気に溢れており、猫の手も借りたいという場所はなさそうである。

日も傾き、暗くなる前に帰ろうかと踵を返したら、先程吾輩を抛り投げた女性が、傍らの託児所から子供を連れて出てきた。X氏も帰るようだ。好奇心でX氏の後を付けると、

小学校に入っていく。どうやら保護者と教師との間の会合が開かれているらしい。帰宅後は、家族団欒で温かい夕飯を食うのだろう。ふと、吾輩は離れ離れになった親兄弟のことを思い出した。無性に悲しくなった。

その翌日、近所の白毛君の主人であるY氏を見かけた。白毛君とは縄張りを争う間柄であるが、Y氏は吾輩にも友好的である。長身のY氏は市街で商店を営んでいる。かなりの知恵者で、自身が企画した商品を異国にも販売している。様々な融資の制度を戦略的に活用し、商いの規模を年々大きくしているとのことである。当然、最新の通信技術にも詳しく、他の商店から相談を受けたり、事業を手伝ったりもしている。吾輩の主人に負けず劣らず、昂然と仕事に取り組んでいる。白毛君曰く、異国への販売はZ老人の力添えがあったらしい。老当益壯なZ老人は、異国滞在の経験と多彩な人脈を活かし、隠居せずにX氏と共に働いている。なぜ人間は働くのか。お互いの主人について白毛君と議論したことがある。衣食住の充足の他に、社会への貢献実感や志が突き動かしているのではないかと。

綺麗に整備された桜並木の遊歩道を歩いているうち、旨い白身の川魚を拾った店を思い出した。このまちの特産の魚らしい。また落ちていないかと市街地にある店に向かうと、通りの酒場より知った声が聞こえてきた。Y氏がいる。おや、X氏もいるし、吾輩の主人もいる。しばしば三人で集まって余暇を楽しんでいるのを知っているが、今日も相変わらず楽しそうに食事をしている。X氏が語るところによると、工場で新しい熱源を使い始めたらしい。どうやらこの熱源は環境にやさしいだけでなく、貯蔵しておく技術もあるとのこと。これは猫にも嬉しい。天災に遭っても寒くひもじい思いをしなくて済む。

Y氏は、今日は何やら新しい商品開発の話を持ち掛けているようだ。まちの農業、工業、商業の連携で名物を作ると意気込んでおり、協力を依頼している。X氏も吾輩の主人も新しい挑戦に乗り気のようなのだ。

吾輩が市街を一回りしてくると、三人が勘定を済ませて出てくるところであった。吾輩の主人が珍しく饒舌である。曰く、子供達の笑顔が一番だ。そのために皆とこのまちで仕

事をしたい。自分の仕事を通して、子供達が誇りを持てるようにこのまちを育てたい、と。

猫は群れることはない。共に挑戦し、共に事を成すことができる人間が少し羨ましい。吾輩は猫ながら時々考えることがある。このまちは実に面白いまちだ。人間に生まれたらこのまちに住み、ここで働くに限る。では、どこにこのようなまちがあるのか？どうやら吉川市が「吉川市における幸福実感向上を目指したまちづくりのための産業振興基本条例」を掲げ、これを目指すようである。